▲製鉄作業のイメージ図(福島県文化財センター白河館まほろん提供)

どんなものが見つかったの？

発掘調査の結果、川戸台遺跡は、9世紀ごろに、鉄づくりなどが行われていたことがわかりました。しかも、鉄づくりからその加工・製品化までを行っており、規模としても相当大きな製鉄・鋳造遺跡であることが明らかとなりました。

発掘調査が行われた面積は、約400㎡という限られた範囲でしたが、鉄滓(鉄をつくったときなどに出る鉄クズ)を含めた遺物の総量は、4.5トン。一般的な車の重さで換算すると、実に3～4台分もの重さです。

また、見つかった工房の跡は、時期ごとに何層にも重なって見つかりました。工房が使い古されると、新しくその上に工房を作り直すということが行われていたようです。そのことから、この川戸台遺跡は、一時的な生産場所ではなく、ある程度長い期間、しかも計画的に、操業されていた場所であると考えられています。

▲発掘調査での出土品。「勒(？)」の字が刻まれた鋳型(左：画像を反転したもの)と獣脚鋳型(右)

川戸台遺跡は、その重要性から平成28年に古河市指定の史跡となりました。また、今年の1月には、古河歴史シンポジウムとして「古河川戸台遺跡をめぐる諸問題～平将門の乱・対蝦夷戦争・天台教団～」が開催されました。近年の研究成果の発表や、討論会が行われ、市内外から約300人もの参加者がありました。

今回ご紹介した川戸台遺跡は、近隣でも類を見ないほど、大規模な製鉄・鋳造遺跡であると考えられています。いまだ明らかになっていないこともありますが、今後の研究や調査によって解明されていくことでしょう。本遺跡は、知名度でいえば、先に述べた「マチュ・ピチュ」などの遺跡とは比べようもありませんが、私たちの身近にも、確かに人々の営みがあった。その痕跡である遺跡は、懸命にそのことを、私たちに伝えようとしています。皆さんが立っているその足元にも、先人たちの歴史が眠っているかもしれません。

蛇足になりますが、シンポジウムのレジュメについては、誰でもご購入いただけます。在庫数に限りがありますので、お求めの人は市役所生涯学習課までお問い合わせください。

古河歴史博物館学芸員　谷中渓